卒業演習(東洋史3)-1

2024/07/16

20l406014　大野紗英

「コミンテルンから中国革命・中ソ対立へ」石川 禎浩

（『ロシア革命とソ連の世紀 第2巻 スターリニズムという文明』

岩波書店　2017年　松戸清裕他　p207-p231）

関心

中国共産党の成立からの歩みと、それらに対してコミンテルンが与えた影響について知りたいと思い本論文を選んだ。

要約

中共設立及び中国革命はコミンテルンに強い影響を受けたが、次第に自立し対立するようになった。コミンテルンの意向による指令は国共合作こそ効果をもたらしたが合作崩壊後は革命情勢を過度に見積もった指令を出し、都市部党組織が壊滅状態になると毛沢東らの農村根拠地に党中央を移転した。その後長征により両者の連絡が途絶えた間の党指導部変更などにより連絡再開後もコミンテルンの意向の強制力は弱まったが、毛沢東の指導権確立などには助言が強く影響した。毛沢東はコミンテルン解散後コミンテルンやスターリンを教条主義的と批判し整風により中共はそれを克服したと述べたがスターリン主義の経典である『小教程』を重視しており、「歴史決議」ではその特徴がスターリンを毛沢東に置き換えて引き継がれている。しかし、毛沢東が多くの社会主義モデルからスターリン主義を選んだというよりは、他に選択肢がなかった結果であるという事実もある。(395字)

はじめに

・ロシア革命の影響はコミンテルンを通じて世界へと広がったが、ソ連・コミンテルン側も政治・外交面で革命の成否に強い関心があった中国共産党に対しては特にそれが強かった

・中共がコミンテルンの支部として発足したが、次第に自立した革命方針を持ち中華人民共和国を建国した後ほどなく同盟関係が崩れ、1960年代以降は対立するようになった

・問いとして、中国の視点からは独自の共産主義革命はあり得るのか、ロシア側の視点では世界の共産主義革命においてコミンテルン・ソ連型のものがどれほど普遍的か、というものがあった

・それに対して流布している解答としては、中ソ対立は歴史的背景から理解すべきであるというものであるがこの答えは正しいのか、正しいとすればどれほど正しいのか

・スターリンによるソ連型共産主義を毛沢東は本当に克服したのか

１．コミンテルンによる中国革命の指導

・中国における本格的なマルクス主義紹介から共産主義組織が結成されるまでは極めて短期間だったため中国ではマルクス主義とボリシェヴィズムが同一視される傾向があった

・また日本や西洋諸国と異なり、第２インターとの関わりがなかった中国にとってはコミンテルンが唯一の共産主義モデルだった

・コミンテルンの意向による国共合作は国共両党に好影響をもたらしたものの、合作崩壊後は実情を知らない指令が度々出され、責任を取る形で中共指導者が更迭された

・ソ連留年組が党中央に抜擢されるも事態は好転せず、都市部組織が弾圧により壊滅状態になると党中央は毛沢東が開拓していた農村根拠地へ移転した

・これに伴い毛は実験を奪われたが、長征により中共とモスクワの連絡が途絶えた間に開かれた遵義会議で指導権を回復した

・連絡が再開した後もモスクワの意向の拘束力は以前ほどなくなったが、助言によって党の運営が左右されることもあり、それにより毛の指導権が確立された

２．毛沢東によるコミンテルン・スターリン評価

・コミンテルンが解散するまで中共は表立って意見することはなかったが、スターリンの死去を経て毛はスターリン指導下のコミンテルンに対して教条主義的であったと評し、整風により中共はそれを克服したことで革命は成功したと述べた

・また、コミンテルン解散後も続くスターリンの干渉についても「革命を許さなかった」と不満を述べ、スターリンの中共軽視もあり自分はスターリン及びモスクワから長年迫害されてきたと認識していた

・近年の研究の通りスターリンらは毛を排していたわけではなかったが、毛沢東がソ連型の共産主義に対して強い反感を抱く以前、毛沢東はスターリニズムをどのようにとらえていたのか

３．延安整風の滋養源としての『全連邦共産党（ボ）歴史小教程』

・延安整風運動においてはマルクス主義重視と教条主義批判による「作風」の刷新が強く求められ、同時に毛は中国党史の総括を重視していた

・しかし、延安整風の滋養源となったのはスターリン主義の経典ともいえる『全連邦共産党（ボ）歴史小教程』であり、毛はそれを中共に普及徹底するとともに党史総括の手本としていた

・延安整風運動はマルクス主義の中国化を図ったと評されるが、実態はむしろスターリン主義の中国化であった

・木村汎のまとめた『小教程』の特徴はスターリンを毛に置き換えればほぼそのまま「歴史決議」の特徴となる

おわりに──スターリン死後の『小教程』と中国の社会主義モデル

・『簡明教程』は中共7期二中全会で再び幹部必読文献に指定され、「歴史決議」を公表する際には内容の加筆修正などスターリンに対する配慮が行われた

・スターリン批判を受けてソ連で『小教程』の発行が停止されたことで『小教程』はソ連を離れ、中国に引き取られた

・スターリンの功罪について毛は「かれの誤りが何十ヵ条あろうとも（中略）その大部分において彼は正しかった」と述べソ連のスターリン批判には同調せず、その評価は毛の死後ほぼそのまま彼に対する中共の評価となった

・また『簡明教程』の評価も革命闘争路線史観をもたらした負の側面は指摘されるものの評価は低くはない

・毛沢東とスターリンの近似性についてはこれまでにも指摘されているが、それは延安的伝統によりスターリン主義に寄ったのではなく、スターリン主義を規範としたため当然スターリン主義に近似したというべきである

・スターリン主義に行き着いたことを「悲劇」とするならば、選択を誤ったことではなく他に規範となるモデルが存在しなかった、あるいは想像しなかったことが「悲劇」である

批評

・コミンテルン及びスターリンが中国共産党にもたらした影響について毛沢東とスターリンの近似性に触れながら書かれており、中国共産党の党史研究をするうえで理解の助けとなる非常に意義のある論文だと感じた

・p217-p218にかけて記述されている毛沢東とスターリンの会談におけるやりとりについて複数の史料を検証していることが分かり、その上で「脚色」あるいは「創作」されたとしている会話内容がある理由を考察している点に本論文の独自性を感じた